

第6回音韻論フェスタ 研究発表題目・要旨

研究発表題目：チーム名を表す形態素の有声／無声の決定要因についての考察
－音節構造と濁音が与える影響について－

神戸大学大学院 博士課程前期課程
大下貴央

要旨

本研究は、チーム名を表す外来語の形態素であるズ／スのゆれに着目し、どのような条件、環境で「ズ」/zu/が現れ、どのような環境で「ス」/su/があらわれるのかを明らかにする。「ズ」/zu/、「ス」/su/のゆれを考察することにより、語彙層間での制約の適用に関して、外来語の音韻は特殊なものではなく、日本語の音韻制約が適用される例を提示する(Tateishi 2003, Fukazawa and Kitahara 2005 ほか)。また、ズ／スのゆれを、実験を用いてデータを収集し、音節量、音節性の喪失、ライマンの法則などの概念と関連付けて考察することにより、従来の研究とは異なった分析を提示する。

マリナーズ、ドラゴンズ、ノドミノス、ウイングスなど、チーム名やバンド名に多数存在するが、英語の複数接辞"s"に由来する借用である。これらは、そもそも英語からの借用である語と、ドラエモンズや50回転ズ、アワーズなどのように日本語で生産された語との両方が確認される。英語の発音、/z/の devoicing を説明するのみでなく、借用語も日本語で生産された語も統一的に捉え、検証する。

和語、漢語、外来語と、日本語の語種は歴史的な語彙層に分かれており、それぞれの語種は音韻制約の適用／不適用をもとに区別されている(Ito & Mester 1999 など)。従来、鼻音(撥音)後の阻害音は無声であってはならない(*NT)という制約は、和語のみに適用され、外来語では適用されないと述べられてきた。しかし、Tateishi (2003) などでは、外来語の接辞ズ(-zu)ではこの制約の適用が確認されると主張しており、ライオンズ(*ライオンズ)やドラゴンズ(*ドラゴンズ)などの説明がなされている。また、-zuの無声化を、同一ドメイン内での複数の濁音の生起を阻止するライマンの法則と関連付けて、語幹が濁音を有しているとズが阻止され、とくに近接の音節が濁音を有する際にズが阻止されるといった分析もなされている(Tanaka 2008)。

日本語における/su/に関して、平板型アクセント生起の阻止や、外来語における促音挿入の非対称性などに観られる/su/の特殊性から、/su/の音節性の喪失が指摘されている(Kubozono et al. 2008, 儀利古 2009)。語幹末が重音節(...H)の語では、仮にス/su/が選択されると、音節性を喪失し特殊モーラ的に振舞うス/su/が、先行する音節と結合し、3モーラ音節である超重音節が生起してしまう。超重音節の生起を忌避する(*σ_{mu})という制約を用いることによって、*NTのみで説明されていた従来の研究とは異なり、...H という音節構造がズを要求する、ということを実証する。また、ズを好む語末の重音節と、ズを嫌う語末音節の濁音という二つの相反する要素が、同時に満たされたとき、どちらが優先されるか実験を用いて検証し、その分析を提示する。